

T1「この時間も、4時間目に引き続き高山赤十字病院の浮田先生にも参加していただきます。よろしくお願いします。

4時間目にはがんという病気について考えました。4時間目の感想を読んでください。(2, 3名程度指名)

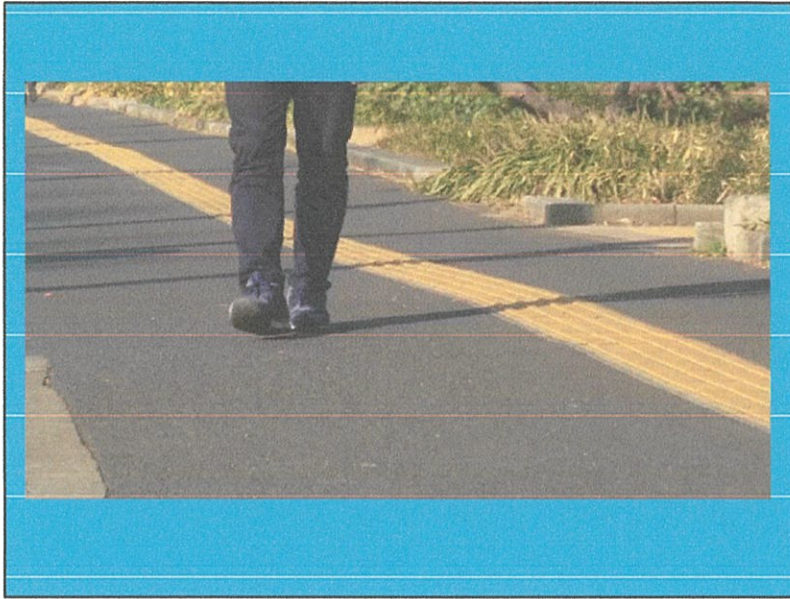
がんのことを勉強して、知識が増えました。誰にでもかかる可能性があることを学びました。がんにかかったらという不安もあるんですね。

【感想に不安や怖いなどの意見がなかった場合】

T1「4時間目にがんの知識について勉強しました。予防のためにできることなどたくさんありました。

最初のアンケートで、怖いと答えている人がとても多くいましたが、その人たちの怖いなどの不安な気持ちはなくなったでしょうか。

少しはなくなったけれども、やっぱり不安な気持ちは残るんですね。」



T1「まずはこの動画を見てください。」

**身近な人が「がん」と診  
断されたとき時、自分が  
できることを考えよう**

11

T1「がんに対する予防や、対策を行っていくことは大事なことです。それでもこの動画にあるようにがんにかかってしまうこともあります。★  
5時間目は、身近な人が『がん』になったとき、自分ができることを考えていきます。」

# 身近な人が「がん」 と診断されたら

11

T1「身近な人ががんと診断されたら、あなたはどのようなですか。」  
T1「ワークシート1に自分の考えを記入してください。(1分)」  
グループ交流→全体交流

## 交流

(生徒の意見をまとめたスライドを映します)

グループ交流が始まってきたところで

T1「意見交流が始まりました。みんなの書いた意見を見ているといくつかに分けられそうです。記入者を決め、班で出てきた意見を整理して記入してください。」  
グループ交流の中で机間指導を行いなぜそう考えるのかなどの理由を引き出していく

具体的にはどんなことができそうかななどを机間指導の中で引き出す

### 【全体交流】

1つのグループを発表させ、それについての追加する意見などを出させる。  
意見がある程度出て、できそうなことがまとまったところで

T1「もし、身近な人ががんになった時に、自分ができることがたくさんあることがわかりました。」

T1「でも、実際にがんと診断されたら、やっぱり不安な気持ちが出てくることもあります。医療の点では、さらにサポートを行っています。専門家の浮田先生に聞いてみましょう。」

## がん治療に必要な支援

体

の痛み・  
つらさ



吐き気でつらい。  
体が痛くてつらい。

がんを取り除くだけでなく、  
薬で痛みをやわらげ、  
その人らしい生活を  
送れるようにします。



医師

5

浮田T「がんの治療に必要な支援について話します。

がんの患者さんには様々なつらさがあります。

まずはがん患者さんの「つらさ」について考えてみましょう。

ここは医師が担当します。

まずは体の痛み・つらさ、吐き気でつらい、体が痛くてつらい、といった症状に対して、薬で痛みを和らげ、その人らしい生活を送れるようにします。

」

## がん治療に必要な支援

心の  
つらさ



将来のことが  
不安で眠れない。

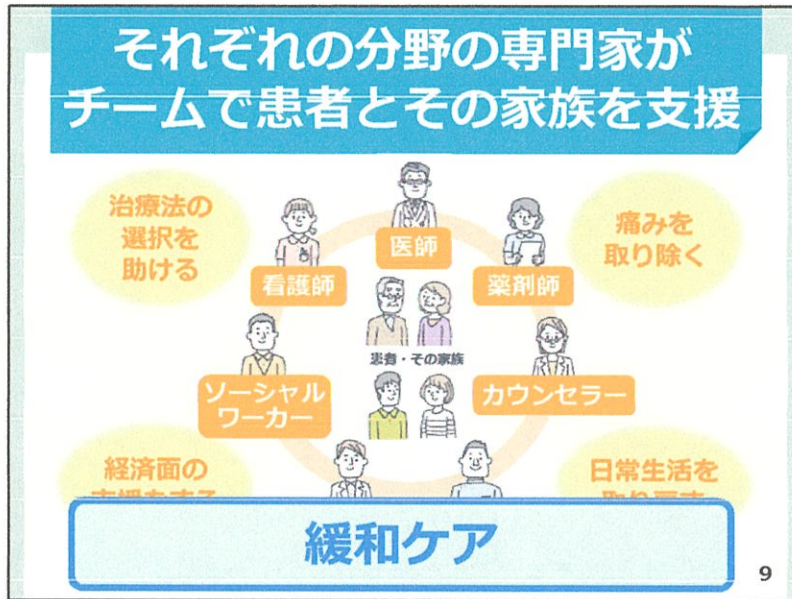
患者さんの不安に耳を  
かたむけ、何が心配な  
のかを考えるお手伝い  
をします。



心理カウ  
ンセラー

6

浮田T「心のつらさについてはどうしましょう。  
このつらさについては、心理カウンセラーが担当します。  
将来のことが不安で眠れない、という患者の不安に耳をかたむけ、  
何が心配なのかを考えるお手伝いをします。」



浮田T「このように、病院には、医師、看護師、薬剤師、ソーシャルワーカー、カウンセラー、栄養士、リハビリ専門職、といったそれぞれの分野の専門家がいて、チームで患者とその家族を支援する仕組みがあります。手術や放射線や抗がん剤だけでない大切な治療、痛みを取り除いたり、治療法を選択を助けたり、日常生活を取り戻したり、経済面の支援をする、それを緩和ケアと言います。」



## 緩和ケアとは

患者とその家族に対し  
病気に伴う体と心の痛み・  
つらさを和らげるための支援



10

浮田T「患者とその家族に対し、病気に伴う体と心の痛み・つらさを和らげるための支援、これが緩和ケアです。」

## なぜ緩和ケアが 必要なのだろう

11

浮田T「30代の胃がんの女性の話をしてします。高山を離れて働いていた方でしたが、母親と一緒に暮らすため転職して高山に帰ってきて3年して、食後の腹痛などがあり開業医にかかり、病院へ紹介され、精密検査をしました。検査結果は、母親にも一緒にきてもらって説明を行いました。がんの告知した直後は、本人も母親も涙ぐんでいたのですが、すぐに本人は、『(母親も)呼び出されたので、きっとこういう話だと思っていました。ショックですが、病気には負けません、頑張ります』と言ってくれました。次に来た時は、『職場のみんなに言いました。社長さんにも病気で休むお願いしました。普通にしています』と、治療に向かう覚悟と準備ができた様子でした。幸い転移もなく、手術は成功し、再発予防のための抗がん剤治療が始まりました。下痢をしたり、発疹が出たり、胃が無いので低血糖発作を起こしたり、いろいろなことがありましたが、1年間の抗がん剤治療を終えることができました。本人曰く『これまで1年間良く頑張りました。周りからも病気をしたように見えないと言われる。』→『ときどき緊張が緩むような日も作って下さい。自分にご褒美をあげて下さい』もう術後10年になりますが、ずっと診察室では自由に話せる雰囲気、今も元気に通院しておられます。

浮田T「30代の胃がんの女性のお話をします。小学2年生の男の子を持つお母さんです。転移があったので手術はせず、化学療法を行いました。化学療法ため入院しなければならぬので、子供さんのことが心配で涙を流す姿がありました。そこで、主治医(というの僕ですが)は1日の仕事が終わってから病室を訪問し、病気のこと以外の、生活のこと、子供さんのこと、などじっくり話す時間を取りました。そうやって患者さんの気持ちを支えながら、化学療法を1年以上続けた翌年の9月、癌が進行していよいよ末期の状態となり入院しました。どうしても子供の運動会を見たいという希望があり、車椅子で外出する許可を出しました。どうしても退院したい、でも最期は先生のところに帰ってきます、というので退院許可を出しました。数日後、自宅で急変され救急車で病院に運ばれてきたので、看取りをさせて頂きました。それから10数年が経って、ある日高校を卒業して高山を離れるという成長した子供さんから、先生に会って話が聞きたいと電話がかかってきました。自分は小さかったのでお母さんのことを全部は知らないから、どういお母さんだったか知りたいのです。そこで、お母さんがどんなに子供のことを心配していたか、一緒に生活したいと思っていたか、どんなに病気を治したいと思っていたかをお話しました。その子は涙を流しながら話を聞いてくれて、お母さんの話を聞けたので、安心して高山を離れることができます、と言って高山から旅立ちました。」

## がん患者の「生活の質」

一人一人の生き方が  
異なるように、  
がんへの向き合い方も  
人それぞれ



自分らしく生きられるよう  
生活の質 (クオリティ・オブ・ライフ)  
の維持・向上が大切

5

浮田T「緩和ケアでは、がん患者さんの「生活の質」を重視します。一人一人の生き方は異なるように、がんへの向き合い方も人それぞれ。自分らしく生きられるよう生活の質(クオリティ・オブ・ライフ)の維持・向上が大切です。治る人も治らない人も、「生活の質」を保てるよう、その人らしく生きられるよう支援します。」

## 松田の家庭の話

- ・ 10年ほど前に父ががんと診断
- ・ 検査の結果おなかに穴をあける手術
- ・ 必要だと感じたのは母の気持ちの支え
- ・ 患者だけでなく家族で向き合う
- ・ お医者さんをはじめたくさんの人が支えてくれる

松田の父もがんと診断されたことがあります。今から10年ほど前です。★

私の父の場合は、何か自覚症状があったわけではなく、定期的な健康診断を受診したことで発見されました。

私は当時高山の学校に勤めていたので、私の母親から連絡を受けました。母親は非常にショックを受けていて、会話がうまくできなかったことを覚えています。

その後、名古屋の病院を受診し、手術を行うことになりました。★

初めの検査では、おなかを切らずに取り除くことができると聞いていました。ですが、よく検査を試みるとそれではダメで、おなかに穴をあけて手術をする必要があることがわかりました。

そのため、再度日を改めて手術を行うことになりました。病院には、私と父と母の3人で行っていたのですが、ここでも母親が動揺していたことをよく覚えています。父が死んでしまったらどうしようと言っていました。★私は、父の病気も心配でしたが、母親の気持ちの支えになる必要があると強く感じました。「自覚症状がないような早い段階で見つかったのだから大丈夫」と励ましていました。また、当時は家族と離れて暮らしていたので、少しでも支えになるように一緒に暮らせる学校に移動させてもらえるようお願いをしました。

手術は無事に成功しました。その後も再発がないか、定期的に病院に通いました。手術から5年が経過し、再発がないことからもう検査に来る必要がないといわれ、今も元気に生きています。★がんという病気は、患者だけでなく、家族にとってもみんなで向き合っていかなければならない病気だと感じました。

私の母親は毎日日記をつけています。父親ががんになった時のところを見せてもらおうと、病院の先生から手術の説明を受けた時のことが記録されていました。丁寧に説明をしてくださり、その時の資料に「この先生は信頼できる」と書いてありました。★

そのことから、家族で向き合うだけでなく、お医者さんをはじめたくさんの方々が家族を支えてくれていたんだということも改めて感じました。それが緩和ケアだったのです。

がんはこれから誰にでもかかる可能性がある病気です。もし、自分や家族がその立場になった時こそ、みんなで協力することが大切だと思います。そして、緩和ケアもあります。正しい知識を持って、がんに向き合い乗り越えてほしいと思います。

# 感想

T1「では、今日の学習の感想を書いてください」

(自分ができることがたくさんありそうだ、もしがんになったときにも前向きに立ち向かっていきたい。家族で協力することも大切だし、それだけでなく緩和ケアも活用していきたいと書いている生徒を指名し、発表させる)

T1「がんは誰にでもかかる可能性のある病気です。もし、身近な人ががんになったときには、今日考えたことを実行してください。2時間にわたり、浮田先生にはわざわざ来ていただきご指導していただきました。皆さんからお礼を言いましょう。」